

全体交流会・パネルディスカッション報告

コーディネーター 桑田 政美（京都嵯峨芸術大学教授）

パネリスト 大谷 新太郎（阪南大学准教授）

横山 葵（NPO法人「人と自然とまちづくりと」理事長）

田端 和彦（兵庫大学教授）

桑田氏

まずそれぞれの分科会からご報告をいただき、その後、テーマが見つければ、それ毎にディスカッションをしていきたいと思っております。時間が6時までということでございますので、なかなか時間がとれないかもわかりませんが、できるだけ、フロアの皆さんも含めて活発な意見交換ができればと思っておりますのでよろしくお願いいたします。それでは、第一分科会の、大谷先生、よろしくお願いいたします。

大谷氏

観光交流の分科会を担当させていただきました大谷でございます。私どもの観光交流、観光という言葉の使い方が非常に難しいというのは、基調講演で桑田先生がご指摘されていたとおりなのですが、地域の資源を磨きながら他の地域の方にそれをお見せして、そこでその人々の移動が発生する。そして交流が発生するといったように広く捉えて、観光や交流に関わりのある取り組みをそれぞれご報告いただく形で進めさせていただきました。

（大谷氏より、【観光交流】分科会の発表内容（5団体分）について紹介）

以上、5つの発表をしていただきました。なかなかそれぞれで共通する点を見出すというのは難しいかもしれませんが、あと、自由討論の時間を確保できなかった私のミスもございまして、うまくまとめられていないかと思うのですが、2つのポイントを考えてお聞きしておりました。1つは地域の資源を本物としてこだわり続けていく、それを極めて商品の形で他地域の方に提供する。その本物へのこだわり方、特にそこには地域住民の主体的な関わりや、地域資源への誇りのも

ち方、そういったところが重要になってくるかと思いますが、そういう本物へのこだわり、そしてそれをどう情報発信するか。そういったところが1つ目のポイントだったのではないかとお聞きしておりました。それから、どの地域にも共通して、資金をどう確保するかっていうのが課題になってきて、これまでもこの発表会で話題にされてきたと、議論されてきたとは思いますが、それぞれの地域が、行政とうまくお付き合いをするなり、いろんな制度を勉強されて、うまく資金を確保されている。あるいは逆に2つの例では、お金を極力かけないで地域の方々に持ち寄っていただいて展開するという、資金の獲得であるとか、あるいは工夫の仕方、そういったところをポイントとしてお聞きしておりました。これに加えて最後の5つ目のご発表のなかで、ちょうど私の横にいらっしゃるお2人ですけれども、とにかくこういうのをやっていると楽しいんだと、熱く、ほんとうにすごい笑顔で語っていらっしゃいました。3つ目として加えるならば、そういうまちづくりに楽しみを見出せるかどうか、感じられるかどうかっていうのがやはり継続性のポイントになってくるのかなとお聞きしておりました。





桑田氏

大谷先生ありがとうございました。それでは引き続き、第 2 分科会の横山先生、よろしくお願ひします。

横山氏

(横山氏より、【地域資源活用】分科会の発表内容(4団体分)について紹介)

我々は 4 つの発表だったんですが、皆さんのなかで、いろんな発表のなかから、いろんなことを学ぼうということで、もうざっくりばらんな意見交換をさせていただきました。そのなかでも特に資金をどういうふうに確保するかとか、事業化するのにはどうしたらいいのかっていうようなことが、ほんとに、本音のレベルで意見交換されたかと思ひます。特に、関西元気な地域づくり発表会も 7 年目になりますが、当初は行政への要望ですとか、資金も調達するのに助成金だのみみたいなお話が中心でしたが、今回、皆さんの発表、たぶん他の分科会でもそうだと思うんですけど、そういうことを中心に考えるんじゃなくて、本気で、どういふ形で取り組んでいってやるのかっていうことを真剣に話し合いをされていました。更に、行政も、上からの助成金、そんな形ではなくて、地域の活動をいかに支援して、もしくは相乗効果を起こすために、どういふふうなお金を取って、どういふふうに助成するかという知恵も体も使ってお金もがんばって取ってきて、一緒になってまちのためにやっているっていうことがすごく顕著に表れていたなと感じる、そういう発表でした。

桑田氏

ありがとうございました。では残る第 3 分科会、田端先生よろしくお願ひします。

田端氏

第 3 部はコミュニティと防災減災ということでございます。桑田先生から観光まちづくりについて 2 面性あるということで、防災まちづくりというのもそういう意味では 2 面性、防災という目的と、まちづくりという目的、しかし、その両者には共通するところがあると、そのようなお話も含めながらお話をさせていただこうと思ひています。

(田端氏より、【コミュニティ・防災減災】分科会の発表内容(5団体分)について紹介)

こういったご報告を受けながら私のほうでは、組織それぞれ違つと、地縁型団体、あるいはボランティアを中心とした団体、更にはテーマ型の団体が集まっていると、いろいろな組織は違ひます。それからプラットフォーム型だったり、事業型だったりです。組織は違ひますが、それぞれがどういふふうに結びついているのか、「絆」というのをテーマにしてというお話をしていたわけですけども、ちょっとピントが難しかったか、要するに説明が不足だったのか、そのことよりも、注目されたのが、この災害ということがテーマでございますので、やはり要支援者をどう支援していくのかというところをテーマとした議論が集まりました。情報をどのように集め、たとえば、情報をどう共有していったらいいか、そういうその課題はどんなものであるかということが、大きく出てまいりました。いずれにしても、コミュニティを強化していかなければ情報も共有できませんし、いざというときに助け合ひもできないということが皆さんの認識だったわけですけども、今のところ情報共有のあり方についての課題、あるいはそういった組織を運営して、いざというときに動く組織にしていくための課題、こういったものがあるというところは皆様、受けとっておられるところであつて、今後各団体でもそういったことを議論していったらどうでしょうかっていうのが私のお願いということで終わらさせていただきました。





桑田氏

それぞれの分科会の担当の先生方、ありがとうございました。第1分科会は「観光交流」ということで大谷先生、第2分科会は「地域資源活用」ということで横山先生、また第3分科会は「コミュニティ・防災減災」ということで田端先生からまとめをいただきました。少し会場の皆さんに、質問を受ける前に私のほうで感想を述べさせていただきます。1箇所にとついていたんですけど、とびとびで第1、第2、第3とそれぞれ2グループずつくらい、聞かせていただきました。各先生方から今まとめとしてありましたが、発表をお聞きした感想として、皆さん熱いです。さすがここに出てきて発表されるグループだなとお聞きしておりました。ほんとに皆さんが地域に根ざして、熱心に取り組んでいらっしゃる様子が、ひしひしと伝わってきました。基調講演でもちょっとお話をさせていただいたんですが、いくつか私も聞きながら、こういう場合どうしたらいいのかなというようなことも出てまいりました。たとえば、「まちづくり」から今の「まち活かし・人活かし」の段階になっているという話もしました。たとえば、観光交流においてはガイドさんの問題とかです。あるところはもう高校生が土曜日とか日曜日に地域を勉強して案内をしている。そういうことで、ほんとに地域に愛着をもつというようなことも含めて、やっているところもあります。また、ツアー、案内用のマップを、高校生が作ったりとか、大学生が作ったりとか、そういう若い人をどう巻き込むかっていうところが大変大きな要素になってきているのではないかと感じました。また、こういう話をさせていただくと、よくガイドさんの話が出るのですが、ボランティアガイド、そのボランティアというのが実は曲者なんです。エンタープリターといっているんですが、エンターテイナーとインテリター、いわゆるガイドさんの両方の要素がいるということです。楽しく案内をする、わかりやすく案内をする、こういうことがほんとに求

められておりまして、私が勝手に造語でエンタープリターと言っております。やっぱり地元感到非常に愛着があってよく知ってらっしゃるんですが、初めてそこに来た人は、全くその情景が浮かばないんです。古事を説明されても、そういうところを、たとえば、ビジュアル的に何かをスケッチがあったりとか、写真を用意するとかそういうようなことができるだけわかりやすく伝えていくということも、是非やっていただきたいし、そういうふうには先ほど言いましたように、若い人を巻き込んで、是非やっていただければなあというように思います。それから地域資源の活用という、これそのものが宝探しにもなるわけですけども、恐竜の足跡を道につけるとか、非常におもしろいこともされておりまして、食への関心というものも非常に強いというぐあいにお聞きしました。そのなかでやっぱり宝探しの5段階の5段階目です。「興ず」というところなんです。事業化、ここがやっぱりポイントになるのではないかと思います。コミュニティビジネスというものがあります。たとえば、温泉地だったら温泉卵を沸いたりとか、そういうものも地域の女性陣が、それを商品にして、きれいなパッケージを作って、それを買って帰ってもらったりとか、屋台みたいな形で小さいお店を出して、そこで販売していく。年間のビジネス額としては、100万単位ぐらいのお金にしかならないかもしれないですが、そういう形で、来た人にも楽しみながらお金を落としてもらう仕組み、こういうものをコミュニティビジネスのなかで、是非、打ち出していきたいなと思っております。それから防災、減災という部分につきましては、非常にタイムリーといえますが、今なくてはならない課題でもあります。ここでは私自身は2つの観点で気になったというか、是非、話しておきたいと思います。1つは、コミュニティ放送の利用です。全国で約250万のコミュニティ放送があるんです。特に宮城県とか岩手県、福島県は震災のときに臨時措置として、災害用の放





送局というのが一気に立ち上がりました。近畿だけでも 16 あります。元々災害時は、放送をかけていても、何かあったら飛び込みで市の方が情報を流すような仕組みになっているんです。こういうところとの連携も、今後やっていけたらいいと思います。もう既にやられてるかもわからないんですが、もう 1 つの観点は、防災・減災コミュニティです。こういうようなことを常に準備からやってらっしゃるっていうのは、防災とともに被災された場合の再生力となります。和歌山なども、昨年 9 月に台風で大きな被害を受けたんですけども、そういうなかできちっとまちづくりを普段からやってらっしゃるところは、防災に限らず、様々な観点から地域の立ち上がりがほんとに早いです。私どもの学生がインタビューとかいろいろ交流もさせていただいているんですが、ほんとに早い立ち上がりで、すぐもう次のことを考えながら動いている。こういうところも、生かせる部分です。ということで、私はまちづくりがもたらす地域の再生力というようなことをアピールしたいと思います。全体的に言えば、やっぱり次世代への継承でしょうか。若者や女性の方が担い手として、もっともっと活用がいるんじゃないか、次世代への継承をどのようにしていったらいいのか、またどのような活動がそういうものに効果があるのかというようなことも含めて、ご意見をいただければと思います。ちょっと感想と私の個人的な見解も含めて申し上げたんですが、今、第 1 分科会、第 2 分科会、第 3 分科会ということで各先生方からのお話も聞いていただいて、それぞれの発表もお聞きいただき、いろいろご意見があるかと思いますが、いかがでございましょうか。

発表者

愚問に属するので恐縮ですけど、各地域の団体、非常にいろいろ工夫されて、非常に優れた活動をされておりまして私も感銘いたしました。私ども

も負けずとがんばりたいと思う。ただし、共通の課題としたら、資金面の確保というのは、意外に仕方ないんだけど、ご苦労されてると思うんです。私たちもこれから、それがうまくいくかどうか。それでだめだとは言わないんですけど、こういう資金面の後押しを、たとえばこの主催者である国土交通省、あとは県とか地方自治体、そういうところが、これはいろいろ助成金なんてあるんだけど、なんとか、こういう元気のある活動団体には、せっかく元気を出してるいので、是非、後押しをしていただきたいというのが私の個人的な意見です。

桑田氏

私が代わって、わかりましたと言いたいんですけど、そうはできませんので、それぞれの仕組みとか、資料やパネルもご準備いただいたりしておりますし、今回主催していただきました近畿整備局もそういう活動の内容を含めて、問い合わせをしていただきましたら、たぶんご相談にはのっていただけたと思います。

発表者

今のご質問について 1 つ私なりの考え方ですけど、これから行政の助成金とか、あるいはコミュニティの助成金があると思いますけど、私は 5 つか 6 つやっていますけど、やっぱり、自主事業をどうしても中心にすえていかないと、これからの 21 世紀の NPO も利益団体も全て一緒だと思えますけど、やっぱり自分たちの自主事業をどう立ち上げるかというところに最初からそう頭に入れてやったほうがいいんじゃないかというふうに思います。私がやっております菊炭プロジェクト、今から 8 年前にやってございますが、このなかでまず我々がやったことは、菊炭体験講座をやるということ、今からもう 8 年間や





ってございます。毎年40名ぐらいの方が来られて、会費は8000円ですから、30万円ぐらいですけども、この30万が意外とばかにならない、ことでございますので、そういうことをスタートから意識してやったという事例でございます。皆さんに是非、助成金も我々いただいておりますけど、これだけ日本の財政問題があれば、桑田先生のアイデア、これはもう不可能に近いかというふうに思います。やっぱり自分で考えた講座を是非立ち上げる。あるいは仲間を増やすための講座をやるということで、私も新しい、今、里山大学を立ち上げることにしてございますが、これも里山、12回シリーズでカリキュラムを今、組んでございます。これを1人2万円ぐらいでやれたらという販材料にしてございますけど、そういうふうに皆さんの、やっぱり地域の人たちを巻き込む、あるいはファンを増やす。ファンクラブじゃないですけど、そういう風に持って行ったほうがいいんじゃないかというふうに思います。

発表者

もちろん自助努力は大切だと思っています。だけど、もちろんおっしゃるとおり、私も他の団体

でやっています、助成金を意外にいただいているんです。ただ自助努力、おっしゃるとおり、それから今までお国や行政機関になんでもなんでも頼むという時代ではなくなったとは思いますが、正直ってそういうものが、そんなにどかともらうというんじゃなくて、推薦していただくとか、ちょっと後押しをしていただく程度のご尽力があればいいかなというそんな程度の意見です。

桑田氏

先ほどから資金をどうやって投入するのかというのは、難しいところですけども、じゃあ資金がなくなったらどうするんだということもありますし、やはり先ほど、資金の方法は、おっしゃったように、様々なことを仕掛けていって、どんどん仕掛けていってダメならダメでしょうがないということも、あるかもしれません。先ほど発表のなかで恐竜の里づくりを、やってらっしゃるところは年間500万でしたよね。500万って、すごい金額をビジネスとしてやってらっしゃると思います。やっぱりこういうのをどんどんどんどん聞きにいただいて、仕組みとか、経理の状況がどうなっているとか、是非こういう機会をもつ、これも1つの場ですからね。やっていただいたらいいと思います。

発表者

私たちは、恐竜の骨、恐竜の骨というのは死んだものです。それに息を吹き込むということが、最大の仕事じゃないかなと思うんです。生かすという部分、生かしてそれがどういうものを新しく生み出すかということに注意してやっているわけです。たとえば、まちづくりの協議会が5年ぐらい活動してきた成果として、これから本格的に収益を目指そうと、今度、法人化して、企業組合として昨年の5月に立ち上げたという経緯がございます。そしてそのなかで、収益の目指すところ、1番利益のあるのは化石です、体験学習ということで、関西の小学生たちも含めまして年間5000人から6000人ぐらい、子どもから大人までも体験にきます。私たちは非常に安く提供している（お1人300円）。元々はといえば、恐竜発掘の現場から出てきた石ころなんです。仕入れはただです。そのただの仕入れの石を割っていただく。それも喜んで割っていった。それで300円だということでも年間5000人、6000人になりました。それかける300円ということになり



ます。経費がかからないが、ただ人件費は、指導員なるものが10人ほどおりますんで、それを配置しています。そういったなかで、食べ物も提供しようということで恐竜焼き、ブタマンと続きます。また次から次へと新しい発想で、新しい商品の開発ということを大事に考えています。今、なんと年間500万ぐらいですけども、よちよち歩きができたかなあとということで、1年目のまだ決算報告していません。来年は、その1.5倍とか2倍とか目指しているが、なかなか大変なことだなあと思っています。

田端氏

非常に楽しいお話だと思う。今回、桑田先生がまちづくりからまち活かしということを言われておりましたが、先ほどのように、新しいものを作っていくというのは楽しいですし、恐らく次に続く方は、継承ということも課題だとおっしゃったんですけども、しかし実際は難しい。そういった活動ばかりじゃなくて、今のものをどう生かしていくのか。先生がおっしゃった生かすのなかには、そこから新しい技術をというのもあると思いますけれども、一方でなんとか今の維持をするというだけでも大変なんだということも多分あると思うんです。そこら辺ですけども、恐らく1つこれからの課題かなあと思っています。特に、このコミュニティとか防災っていう私の分科会では、生き残らなきゃいけないとか、あるいはコミュニティで先ほど再生力と言われましたけれども、何かあったときにまた再生しなければいけない、ほんとにそういう意味では、恐らく先生が言われた継承手段。継承は日本の少子化した中で1番たぶん強いテーマだなと思うんですけども、私は是非とも、お金があんまりかからなくても、どう人を巻き込みながらやってきた、うまくやってきた、分科会の活動をちょっと聞いていただいたらと思います。防災頭巾を作るときにお布団屋

さんの寄附があったという経緯をお伺いすると、ほとんどお金かからなくても、こういうことが出来るという形があると思うんです。もしよければ伺えないでしょうか。

発表者

うちのほうは大変ささやかなことですので、全然お金は使わないんですけども、今言っていたのは、防災頭巾を作ろうかって言ったときに、その時の協議会の会長さんが元々布団屋さんでした。在庫の綿があります。それから生地もあります。外側だけ新しいのを買ったんですけども、そういうものを持ち寄ってくださった。これが大変大きくて、本当に外側だけ、180枚年間作るんですけども、1回に作るんですけども、たぶん3万円ぐらいで180枚を作ったと思います。その他に、今回ご紹介させてもらいました「竹あかりの集い」というところでは、豚汁などを食べる体験もしていただきました。そういうときでもお百姓さんが多い土地ですので、材料の提供を呼びかけます。そうすると大根10本必要ですとか、ネギ何把必要かというリストをお出しすると、それじゃあ、これをいつ持ってきますとかって言っていただけ。そういうことで賄えるところがたくさんあると思います。ですから、そんなようにしてお金のかからないイベントを心がけております。

田端氏

災害が起きてしまうと、お金が一切役に立たないです。要するに、流通機能が少なくとも3日か4日間は機能できませんから、そうすると先ほど、おっしゃっていたように、これありますかっていうのは、実はものすごく価値があるやり方でして、そういう意味では日常的にこういうことをされていると、いざとなったときに、大根はすぐ集まるということがたぶんわかるというふうに思い





ます。そういう意味で、先ほどちょっとお金の話でいかに次につなげていくか、そのために新しいイベント、新しい企画をという前向きな方向というだけではなくて、いかに地域を維持していくのかというこの面も、もう少しどなたからご議論いただければと思います。

桑田氏

非常に大事です。実は私の専門はイベントですが、東北復興博覧会の計画が残されています。ただ、考え方はまさに先生がおっしゃったように、1つは鎮魂の意味を込めて、被災をされた方、亡くなられた方々の魂を祈るといいますが、そういうものを考えることが1つと、そればかりやってはいけませんので、復興ということで、新しい将来、未来に向けてどうしようかとこの2つの側面があると思います。「人間」それから「時間」、「空間」という3つの「間」があります。時間というものの中には歴史的な時間もひくくめて、あると思いますし、空間というのは今、皆さんが活動してらっしゃる地域という空間もあれば、またネットワークの圏外、その隣もひくくめた空間があります。どのようにそれぞれ地域の方がまちづくりのなかで考えていくかということになるかと思っています。時間的にも過去の時間と、将来に対する、期待する時間というような、これら3つの「間」をどのようにまちづくりのなかで考えて行動していくんだという話で、させていただいたりしております。今のお話もひくくめていかがでしょうか。

発表者

お話の趣旨とずれるかもしれませんが、私のところは、コープまちづくり協議会というところの活動の一環ですので、住民が1万4千人いますが、全員が対象ということで、私たちの活動も緑化の活動は自治会をベースにしています。各自治会1

戸あたり年間100円をご供出してもらおうということで先ほどちょっとご紹介いただきましたけど、マンションの住民の方も、実際にはマンションの自治会はのり面が入っていないわけです。ですけど、100円出してもらってニュータウン全体のなかののり面のお金を供出してもらおう。そういうことで、直接払ってもらわなければならないし、自治会経由ですから、マンションの住民の方も払っているかどうかというのは、たぶん実感はないと思います。でもやっている側、提供している側は、春と秋に草刈りをしたら、1年中、山際はきれいになっている。だから、外から見たらすごくきれいなまちになっている。うらやましがられる地域で市になんとかやれと言われるんだけど、住民が自分で金を出して、人も出しているということで活動しておりますので、よそから来た人がけっこうきれいなまちだから住みたいと、資産価値が上がってるってということと、住んでる人はきれいなまちだから出ていきたくなくなるという、そういったところでは住民の方とのつながりっていうのを大事にしています。ただこれからはもっと住民の方に、私たち自治会がやっているということも、もっと見える形になんとかできないかな。そしたらもっと一体感が生まれるのではないかと、課題だと思っております。

桑田氏

一体感っていうところがやっぱりまちづくりのなかでは、大変大きな問題になってきますね。見える形で活動をやるっていうのも世間では最近、可視化とかいって、非常に話題になっておりますけども、そういう面がある一方、先ほど大谷先生のほうから情報の発信とか、情報の共有っていうのも第1分科会の課題であるのではないかなということもおっしゃっていましたが、いかがですか。





発表者

分科会でもちょっと言ったんですけども、皆さん、出す側は、私はこれがいいと思いますという「主観」ですよね。地域にしても何にしても、それに対して実際、来ていただく方、買っていただく方がほんとにそれをいいと思っているかという「客観性」というのが、たぶん全体的にやっぱりちょっと足りないのかなという気がします。特にテレビ番組を作る場合は、視聴者は客観的に見えています。特に僕がやっているのは、海外のテレビ局が放送して、海外の視聴者が見るということで、海外のテレビ局さんが「この番組を自分の視聴者が見るだろうか、見せる価値があるだろうか」という、1回スクリーンを入れていただいた上で放送されて実際見ていただいているので、また番組なので、CMとかじゃないので、見る人は日本酒に興味がある、日本に興味があるっていう、そういうターゲットがしぼれてくるっていう形でメッセージを出すのにはいいツールなのかな。こういう感じで反対側から1回見ていただいて、実際、もう1回違う角度から見ると、今までと違うような展開ができるんじゃないかなと思います。

桑田氏

ありがとうございます。宝探しをやりますと、今おっしゃったように、「これええやろ」という子が出てくるんです。でも外から見たら、「えっ」とか「うちにもあるやん」という、そういうギャップっていうのが非常に多く見られますので、今のお話はやっぱり、外の目から見たらどうなのかというところが、非常に重要かなと思う。最後にそれぞれの先生方から、今の皆さんからいただいた意見も聞いていただいて、コメントをそれぞれいただき、最後締めくくりができればと思

いますが、その前になんかこれだけは言っておきたいという方が、いらっしやいませんか。

発表者

先ほど桑田先生がおっしゃった世代間交流っていうのがやっぱり重要だと思うんですよ。私もいろんなことやっておりますけど、やっぱりそういうなかで、関西元気づくり発表会にもう少し世代の若い方、あるいはサラリーマンの3、40代の方、そういうその世代間の交流の場をもったらどうかというふうについて思っています。

発表者

嵯峨鳥居本の嵯峨野保勝会です。京都の嵐山よりもまだ奥のほうの山で、2月26日にイベントがあります。ちょうど京都府観光客緊急回復事業の制度を受けて、愛宕念仏寺とって、羅漢さん、千二百体羅漢さんがある、愛宕念仏寺さんでトークサロンっていう企画をさせていただきます。ちょうど、この26日の日曜日の1時から無料で拝観していただいて、住職に説明していただけるので、よかったですら、もし興味のある方来ていただけたらうれしいなと思ひまして、この場を借りて宣伝させていただきました。砂の器の松本清張さんのサスペンスのドラマに出はった重要文化財の本堂なので、すばらしい天井絵を見ながら住職さんの説明を聞いたりしていただけるので、帰りにはおいしいマフィンのおみやげもつけてますので、無料ですのでよかったですら鳥居本のほうにも来てください。



大谷氏

第1分科会でも申し上げたのですが、是非、発表なさった方々同士での行き来もあるとおもしろい展開、流れになるのかなと思っております。先ほど情報発信のお話もあったんですが、観光の場合は来訪者に来ていただくという、ある意味、情報発信をしようとしてもターゲットとなるものをイメージしやすいんですが、でも実はそれぞれの地域で熱心にまちづくりをされている方は、今やってらっしゃるこだわりであるとか、楽しさっていうのを誰かに伝えていく必要があるわけですね。地域の方々をもっともっと巻き込んで、人を、関わる方を増やしたりっていうときに、先ほどおっしゃったようなお客さんであるとか、あるいは活動に参加されてる方々がどんなふう楽しんでらっしゃるのか、どのように評価されているのかっていう情報をもうちょっと大事にされて、そういう発信を共有し、外、ターゲットとする対象に向けて流していくという取り組みをよりされるとおもしろいのかなというふうにお聞きしておりました。それから、今回私の担当させていただいた第1分科会では、どの地域も実は重伝建であるとか、風景街道であるとか、日本三景、熊の古道もキラコンテツもっているんですね。ですけど、いずれもそれに頼らない取り組みをやらなければ継続できないという問題意識をもたれて活動されてきたということで、この先不透明な情勢で、資金の獲得もどうするんだ、若い人をどう巻き込んでいくんだということもあるかと思えますけども、そういう一見わかりやすい材料をもっている地域でも、それぞれが活動を積み重ねてこられて今回発表された成果につなげていらっしゃるということですので、この先、今日このあとの交流会でも情報交換をされて、それぞれの取り組みの成果というものを学び合う流れにつなげていただければというふうに思います。

横山氏

私は今日の分科会の発表もそうですし、今日全体の発表もいろいろ聞かせていただいて、ほんとかような活動っていうのは、自分たちが元気ががんばってるっていうだけで終わっていた時代があって、更に、地域の人巻き込んで、地域の人をほんとに楽しく巻き込んでいけるという技術がずいぶん発達して行って、地域の人に参加して、楽しさを発見するとか、新しい事業化をするとか、いろんなことに展開し始めてると。それに対して行政も、全てとはいいいにくいんですが、行政もき

ちっとそれをサポートするとか、役割を担ってくださるっていうようなスタイルに段々変わってきて、お金もそうですし、先ほど防災のほうから出ていた、お金だけではなくて、いろんなものができていくっていうか、価値が出てくるみたいなことがどんどん積み重なってきているような、ほんとに関西元気な地域づくりが、最初に比べるとどんどん本格的に回りだしたなという、最初はなんか言うてるだけみたいな、元気づくりになったらいいかな、みたいな感じから、ほんとに元気づくりにするためっていうか、元気づくりになってきた。そこで、たぶん今我々の発表のなかで感じたのは、ほんとにどうやって発信していくの、本当に元気になるために自分たちは勉強する気も満々にあるし、勉強するのが必要だとも思っているし、なんか足りない、なんで次にいけへんのかっていう、悩んでいるっていうこともあったりすると思うんですね。先ほどの映像の方のお話も、皆さんきっと真剣にそうだななんて思ってたかと思うので、こういう局面を勉強できる機会であったりとか、そういうことが共有できるような交流会っていうものが更にあると、更なる次のステップにいくんじゃないかなと。そうするとますます自立できる。元気になる地域づくりができるんじゃないかなっていうふうなことを、とても今回の第7回で感じました。

田端氏

先ほども話題にさせてもらったんですけども、横山先生の価値を生み出すということにからめながらですけども、恐らく今日の話はけっこう価値を生み出す内容が大きかったと思うんです。それは新しい事業ということも含めてなっておりまして、防災コミュニティの部分というのは、その価値を生み出すために何が必要なのかっていう、その基盤っていうか、足腰といいますか、その部分を少し議論させていただいたのかなという



ふうに思っております。そのためには、実は、いろんな地域の組織がございます。その組織がそれぞれ様々な形式をとって、地域でなんらかの活動をしています。そういったものがほんとに重なっていかないと、先ほどおっしゃった価値を打ち出す、ということにならないということで、今日のコミュニティ活動の部分の部分というのは、大きなお金を動かしたりとかいう形じゃなくて、ほんとに地道で、ほんとにささやかな活動などが積み重なって、まちがきれいになってますとか、公園が緑が豊かになってますとか、防災の意識が高まってますという、こういうほんとの基盤の部分を作ってきてるというふうに思いますので、こうしたものも1つ基盤にしながら、観光であるとか資源を生かして、そういうまち生かすと、関わっていければなというふうに思います。

桑田氏

3人の先生、本当にどうもありがとうございました。もうそれぞれからまとめていただきましたので、私の言うことはないのですが、宝探しというのは、是非取り入れて、いろんな形でやっていただければと思います。たとえば、小学生をつかって、宝探し探検隊というような形でイベントを総合的にやるというのもありだと思えます。そのなかで、防災環境をつくったりとか、そういう活動も生きてくると思えますので、是非やっていただきたいと思えます。1番始めに宝探しの元は岩手県の二戸ですって言いましたが、実はあそこで1つ象徴的な宝というのがあります。ちょっとご披露だけして、終わりたいと思えますが、あそこは大変東北の田舎で、貧農、いわゆる貧しい農家では、ひえとかそういうものしか食うものがなかったわけです。ホテル飯とかいって、そういうもののなかに米粒がちょこっとある、そういうような生活を強いられていたところでした。ひえとか、そういう雑穀っていえば貧しさの

象徴だったわけです。ところが、WHO、世界保健機関がそういうものは非常に健康にいいんだということを発表したわけです。その途端に、その雑穀というものが光り輝いてきて、地域でどんどん事業化されていて、今や貧しさの象徴であったものが、地域の宝として、全国発信できるようになってきました。ホームページなんかにも出ているんですけども、やっぱりもう一度地域を見直すということです。そういうことで、フレームを6つ上げさせていただいたんですけども、第6フレームで、不満だとか、そういうことも未来のエネルギーへ変わるといって、その可能性があるということを行いました。そういうことが、まちづくり、地域づくりに活かせるような形になれば、私も幸いと思っております。是非これを機会に皆さんもどんどん交流していただいて、またどんどん地域の価値も上げると同時に、お客さんの価値も上げる、住民価値も自ずから上がるように、価値というものは是非、お考えいただければと思います。これで交流会は終了とさせていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

閉会后、近畿地方整備局建政部より、地域づくり施策について紹介させて頂く。

